

研究ノート

人権・教育・市場

——広田照幸『教育』を読む——¹⁾中 澤 信 彦²⁾

要 約

経済のグローバル化が教育改革をめぐる言説に及ぼしている影響について、広田照幸氏の近著『教育』を手がかりに、人権問題との関わりも視野に含めつつ考察する。新自由主義的な経済システムとそれに適合的な教育システムの問題点を指摘し、エコロジカルな原理にもとづく教育改革モデルを一つの代案として素描する。

キーワード：人権；教育；市場；社会化；配分；個人化；グローバル化；逆機能；教育改革；新自由主義；学校選択；異質な他者；エコロジカルな原理

経済学文献季報分類番号：01-14；02-13；05-41；06-13；15-82；15-86

I

広田照幸氏（東京大学大学院教育学研究科教授、専攻は教育社会学・社会史、以下敬称略）は、高橋伸夫氏（東京大学大学院経済学研究科教授、専攻は経営学・経営組織論）と並んで、私がここ数年にわたりもっとも注目し期待している社会学者である。銜学趣味に走らない明快な論理と文体。それでいて彼の教育論は常に啓発的で挑戦的だ。広田（1994）（2001）（2003）は巷に跋扈する教育言説の虚妄を具体的なデータに基づいて明るみに出し

1) 本稿は私が2005年度秋学期に関西大学経済学部で担当した「経済学特殊講義Ⅱ（人権・教育・市場）」——広田（2004）は当該講義の教科書として使用された——の講義ノートの一部を書評論文形式にまとめたものである。講義ノートの作成準備にあたって討論相手になってくれた中澤ゼミ3期生（浅田美緒・池田啓・儀野亮太・大川加容子・近藤美希・杉之尾博子・多屋浩志・林真希子・福井大輔・福田響子・藤森大司・丸川博史・本山潤平・芳村和真）、3期ゼミ・チューターの日置麻友さん（関西大学大学院生）と松本哲人さん（兵庫県立大学大学院生）には、ここに記して感謝の意を表したい。また「特殊講義Ⅱ」の受講者の皆さんが本稿の充実に大きく寄与してくれたことにも感謝したい。なお、本稿が主として想定している読者は、経済学・教育学の専門的研究者であるよりはむしろ「特殊講義Ⅱ」の受講者を含む経済学部学生であることを、あらかじめお断りさせていただく。

2) 関西大学経済学部助教授

E-MAIL: nakazawa@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nakazawa/>

た。青少年は凶悪化していないし、家庭の教育力は低下していない。日本の治安は悪化していない。日本の学校は他の先進諸国に比べてうまくやってきている。ごく一部にダメ教師はいるものの、日本の学校の先生の質は概して高い。我々はマス・メディアが垂れ流す教育の荒廃イメージに騙されてはならない、と。

岩波書店の「思考のフロンティア」シリーズの一書として公刊された『教育』（広田（2004））は、「もっぱら、歴史資料や統計資料など、具体的なデータに基づいて、これまで教育について書いたり考えたりしてきた」「理論家というよりも実証研究者」（同上111ページ）である著者が、初めて本格的に筆を執った理論的著作である。「社会化／配分」「個人化／グローバル化」という概念枠に基づき、既存の教育言説の位相——過度な教育不信と過度な教育依存の構造——を整理し、教育の未来に向けて、新自由主義な教育改革モデルとは異なる新たな選択肢を展望・構想している。まことに野心的で注目すべき著作である。

II

広田（2004）の概要を以下に示そう。

教育システム（学校）は2つの機能——①子供たちに何か（知識・技術・道徳・ルールなど）を教える・伝えるという社会化機能、②子供たちを分類・評価して社会の各所に振り分けていく選抜・配分機能——を果たしている。後者の機能に否定的感情を抱く人々はいくれども、学校がそうした機能を持っていたがゆえに貧しい人々にとって夢と希望の場であったこともまた、否定できない事実である。この「機能」という視点は教育改革の功罪を考える上で不可欠である。社会化の機能にウエイトを置くか、配分の機能にウエイトを置くかで、考え方はずいぶんと異なってくる。「教育の機会均等」よりも「教育（における選択）の自由」「規制緩和」を強調し「当事者のニーズや自己決定」を尊重する近年の新自由主義的な教育改革論は、社会化の機能だけに目を向けている³⁾。あるいは、社会化の機能に注視するあまり、配分の問題に関して楽観的にすぎる。新自由主義的な教育改革論がはらむ一番のジレンマは、社会化問題に目を向けた改革が配分の領域で逆機能を生じる、という問題である⁴⁾。

一口に「教育（における選択）の自由」と言っても、どの学校を選ぶか（学校選択）、何を学ぶか（カリキュラム選択）、どういう学校作りをするか（学校参加）、授業にコミットす

3) 中谷（1995）、伊藤（2000）88-96ページを参照せよ。なお後者は「特殊講義Ⅱ」の受講生に講義資料として配布された。

4) 広田（2005）82ページ以下も参照せよ。「潜在的な逆機能」は、保守主義者が進歩的政策を攻撃する場合にもっとも典型的に採用されるレトリックであるが（ハーシュマン（1997））、むしろ教育改革論議に限らずあらゆる政策を評価する上で必須の視点だと言える。決して保守主義者の専売特許ではない。

るかどうか（学びからの逃走）など、様々な問題群から成り立っている（同上71ページ）。例えば、カリキュラム選択の問題を考えてみよう。子どもたちは、学校では「好きなペースで好きなことを勉強しなさい、それが君にとっては一番いい」と言われ、マイペースで好きなことを勉強する。しかし、ふと気がついてみると、社会内の望ましいポジションは、文化資本に恵まれた高い階層の子どもによってすでに占められてしまっている。配分の領域における逆機能とはこういった事態を指している。

「教育の成果はいずれ労働市場で厳しい判定を受ける。ごく一部分のエリート向けの学校へ行った者を除いて、多くの子供たちは、大人になったときに自分に開かれている職業の選択肢が、さほどよくないものばかりであることを思い知らされることになる。もっと魅力的な選択肢は、別の学校や別のカリキュラムを選んだ誰かにすでに占有されてしまっているからである。慌てて「生涯学習」⁵⁾に取り組んでみても、キャリアアップに励むエリートたちとの差は開く一方、ということも生じる。つまり、「学校時代は誰もが幸せ / 卒業したらほとんどが大変な人生」というシステムになりかねないわけである」（同上80ページ）。

カリキュラム選択の問題以上に、教育学者の大きな関心を集め、大きな論争へと発展したのが、公教育（特に義務教育段階）における学校選択と学校種別の多様化の是非をめぐる問題であった⁶⁾。広田は「学校選択制が教育の質をめぐる学校間の競争を生み、その結果、どの学校に行く子供も得をする」という議論は、「配分の側面を無視する点で誤りである」（同上47ページ）と断言する。しかし、彼は逆機能を配分の観点からのみ考察しているわけではない。

「学校選択問題がはらむ問題として、私にとって見過ごせない問題だと思われるのは、

5) 「機会の配分の問題に関して、あらかじめ強調しておかねばならないのは、生涯教育・生涯学習の機会の充実が、すべての配分問題を永遠に先延ばしにする（そして最終的に無視しうる）かのような、幻想を抱いてはならないということである。・・・学校で何も学ばなかった者は、後から学び直すことに、膨大な時間を費やす必要が生じるのである。逆に、既に一定程度の蓄積がある者は、より少ない時間、経済コストをかけただけで、より経済的に高い価値を持つ知識や技術を入手することができる。・・・生涯教育・生涯学習の機会の充実は、機会の配分の公正さという点では逆進性を持ってしまいかねない側面すらある（というか、行政の強力な干渉・統制がないかぎり、必ず逆進性を持つ）。少なくとも、不平等な進学機会・職業機会の配分は生涯教育・生涯学習の拡充では解決できないし、生涯教育・生涯学習の拡充によって、配分問題を無視しうると考えてはならない」（広田（2004）12-4ページ）。

6) 広田（2004）43ページ以下。学校選択制については『教育学年報』誌上で数年間にわたって藤田英典氏と黒崎勲氏との間で論争がなされた。黒崎（1994）（2000）、藤田（1997）（1998）（2000）も参照のこと。

スライスされた、それぞれまったく違う均質空間で人生を過ごしてきた人々から形成される、社会意識の分断と生活世界の局所化、その結果生じる「異質な他者」への無関心や不寛容である。選択は私的(private)ではあるが、他者と無関係な(solitary)行為ではない。

このように、義務教育段階で生じつつある学校選択・学校種別の多様化は、特定の富裕階層が、ライフチャンスの面でも、社会関係の面でも、合法的に「他者」を排除する仕組みなのだ。いや、選択制の拡大は、中間層による下層の排除、問題のない親・子供による問題を抱えた親・子供の排除、「日本人」と来住外国人など、もっと多層的な社会のスライス状⁷⁾の分断を生み出す。学校選択問題は「排除する/される」という点で、きわめてクリティカルな政治的イシューだといってよい(同上57ページ)。

ここで広田が指摘しているのは、「ライフチャンス(配分)」の領域においてのみならず「社会関係」の領域においても逆機能——「異質な他者」への無関心や不寛容——が生じる、ということである。この指摘は重要である。「教育のあるべき姿」が「われわれはどういう未来社会を欲するのか」という次元と関連づけて議論されなければならないのだとすれば(同上99ページ)、われわれが自問すべきなのは、「多様な「他者」をあからさまに/こっそり同化したり排除する」(同上56ページ)ような社会を欲するのか、それとも彼らを「コミュニティのメンバーとして感じる」(同上)ような社会を欲するのか、という問題なのである。われわれが欲するのはもちろん後者であろう。

III

個人化とグローバル化の趨勢はもはや不可逆的である、と広田は考える。新しい状況に対応する新しい教育システムを求める声が強まってきている。具体的には、経済のグローバル化によって地球規模での競争がもたらされ、エリートと非エリートの教育を明確に分けて養成してゆく教育や、産学提携論にみられるような経済発展と直結した教育を求める声が強まってきている。このような新自由主義的な教育理念への「批判が困難な理由の第一は、そしておそらく最も大きな理由は、それが、経済のグローバル化という新しい状況に対する教育システムのあり方について、明確な像を提示しているという点である」(同上75ページ)。しかし、忘れられてはならないのは、グローバル化を構成する諸要素は多次元的であり、必ずしも「地球規模での競争」に収斂していくわけではない、ということだ。「個人化の進展

7)「スライス上」と誤植されていたのを訂正した。

による価値観の多様化、移民の増加による文化的多様化、さらに、経済のグローバリズムによる所得格差の拡大の可能性などを考えると、「異質な他者との共存」⁸⁾が、これからの日本でも、公教育の重要な教育課題になってゆくだろう」（同上56ページ）と広田は展望する。国際競争力の強化ばかりでなく、いや、それ以上に、グローバルな環境破壊、移民の増加による文化的多様化への対応もまた、教育改革がその理念の内に含めるべきクリティカル・ 이슈となるはずだ。しかし新自由主義的な教育改革論はこれらの 이슈を本質的に軽視あるいは黙過している。

広田は「一つの代案」として、エコロジカルな原理にもとづく——ゼロ成長社会を前提とする、経済成長よりも財や機会の分配の仕方にウエイトをおくような——教育改革モデルを提唱している。代案としてはまだまだ抽象的で青写真の段階にとどまるが、目指すべき方向ははっきりと示されている。

「・・・資源・環境の有限性を考えると、新自由主義的な経済システムは、不公平で持続不可能なシステムだということである。・・・貧しい国々の人々が今よりも豊かになる権利をもしわれわれが尊重するのであれば、また、遠い将来の子孫（今の子どもたちではない）がある程度の豊かさを持った生活をしてゆく権利をもしわれわれが「ご先祖」として保障してやる必要があるとするならば、新自由主義的な原理による経済発展には、重大な問題があることになる・・・。環境的公正の問題は、もっと持続可能な経済システムの必要性を提起しているのである。それゆえ、グローバルな経済競争でトップを走り続けるための教育、というものとは別のものがデザインできないのかを、考えてみる必要があるだろう。

ほとんどすべての学校改革論や教育論は、長期的にみてわれわれが直面している、最も深刻で重大なこの問題から目を背けている。それは想像力を欠如させていると見えなところにいる二種類の「異質な他者」——開発途上国の人々と遠い未来の世代——を、日本の教育学の中にどう組み込むかという問題でもある。心情的な連帯、などという感傷主義はやめよう。むしろ、教育システムが持つ、財や機会を配分する機能が重要である。開発途上国の人々を含めた人々との財やチャンスの再配分をどうするかという問題や、未来世代との再配分の問題に対して、教育学が何をできるのかを考えてみる必要がある」（同上80-81ページ）⁹⁾。

8) 「共在」と誤植されていたのを訂正した。

9) 広田が本書の扉に R. ローティの次の言葉を掲げた理由はもはや明白であろう。「デスクの前に座ってキーボードをたたいているわれわれが、手をよごしてトイレを掃除してくれている人びとの十倍、わ／

以上が広田(2004)の概要であるが、すでに明らかなように、教育改革をめぐる近年の言説は、経済のグローバル化という主題との密接な関係において成立している¹⁰⁾。しかもそれが「異質な他者とどう向き合うべきか」という人権問題をも携えている。三者は相互に密接に絡み合っているのである。

人権問題を主として講じることになっている「経済学特殊講義Ⅱ」において¹¹⁾、広田(2004)のような著作を教科書として用いたことは¹²⁾、きわめて異例であつただろうし、「経済学部」の講義でなぜ人権を論ずるのか?人権を論ずるのになぜ教育改革が素材なのか?」との疑問を抱いた受講生も少なからずいただろう。本稿によってそうした疑問が最終的に払拭されることを願っている。

IV

広田(2004)の紹介だけで本稿を閉じるわけにはいかない。最後に、話が多少通俗的になってしまう嫌いはあるが、彼の教育改革論を(本稿が読者として想定している)大学生の日常生活に繋ぐための回路を示しておきたい。

広田は「想像力を欠如させていると見えないところにいる二種類の異質な他者」として「開発途上国の人々と遠い未来の世代」を挙げている。しかし「異質な他者」は決してこの二つに限定されるわけではない。広田は強調していないが、想像力の欠如・衰弱ゆえに、眼前に存在している他者が見えていない、その声が聞こえない、という事態は十分に起こりうる。その他者は、ある場合には、ホームレスや貧困層であるかもしれない。別の場合には、身体障害者や(在日コリアンをはじめとする)エスニック・マイノリティであるかもしれな

れわれが使っているキーボードを組み立てている第三世界の人びとの百倍の報酬をもらっているというのは耐えきれないと思うように、私たちの子供を育てるべきである。・・・子供たちは、自分たちの運命と他の子供たちの運命との不平等を、神の意思だとか、経済効率のために必要な代価だとかでなく、避けることのできる悲劇だと見ることを早くから学ぶ必要がある」(広田(2004) ii ページ)。

10) 近年強化されつつある国家レベルでの包括的な道德教育の企て(日の丸・君が代の教育現場への強制、『心のノート』、教育基本法改正論議など)は、経済のグローバル化と決して無関係ではない。むしろグローバル化のインパクトへの対処の一形態として理解されるべきである。グローバル化が旧来の均質な国民文化を揺るがしつつあるために、ナショナル・アイデンティティの再強化によって、この危機に対処しようとしているのである。広田(2004) 27-29ページ、59ページ。「国を愛する心」をめぐる議論については、高橋(2003)、入江(2004)、広田(2005b)を参照のこと。

11) 本稿ではとりあげる余裕がないが、講義では堀尾(1991)の「人権としての教育」論についてもその意義と限界の両面から紹介した。私自身は、川本(1998)の「それを失うと自分が自分でなくなるような大切なことがら」としての人権規定に強い共感を覚えている。

12) 広田(2004)を「難解」だと感じた人は、ぜひ広田(2005a)を手にとって欲しい。広田が様々な機会に行ってきた講演や学会発表の原稿を加筆・修正の上まとめたものである。話し口調なのでたいへん読みやすい。広田教育学のエッセンスを知る上で最適の一冊と言えるだろう。

い。いや、今日では、万人が「異質な他者」になりうるとまで言えるかもしれない。この点に関連して、私は「特殊講義Ⅱ」で、自分自身の小学生時代のエピソードを絡めながら、受講生に次のような話をした。

私の通っていたA小学校には、同級生のT君のお祖父さんが用務員として勤務されていた。校長先生が朝礼で紹介されたので、おそらくほぼ全児童がそのことを知っていたように思う。毎朝「T君のお祖父ちゃん、おはよう」と元気な挨拶が飛び交っていた。用務員さんは子どもたちにとって決して「異質な他者」ではなかった。間違いなくA小学校というコミュニティの一員だった。しかし、今自分が勤務している大学に目を移すと、毎日目にしているはずの用務員さんや守衛さんと日常的に挨拶をとり交わしている人が果たしてどれくらいいるのか、正直、不安を覚えてしまう。教室やトイレがいつでも美しいのは当たり前なのか？ 作業中の用務員さんを見かけた時、「ありがとうございます」「ご苦労さまです」との言葉が自然に口をついて出てくるだろうか？ 誤解しないで欲しい。私は決して道徳やマナーを説いているのではない。眼前の人々が視界に入らなくなっている——「異質な他者」化されつつある——ことの危険性を指摘しているにすぎないのだ¹³⁾。一声かける。言葉を交わす。それは、眼前の他者を無関心から解き放ち、可視化し、コミュニティのメンバーとして迎える意志を表明するための、ささやかだがきわめて意義深い技法なのだ¹⁴⁾。それは、姿の见えない開発途上国や未来世代の人々への配慮へとつながっており、さらにはエコロジ的な危機を打開する小さな一歩でもあるはずだ、と。

次のような授業アンケートを提出してくれた受講生がいたことは、講義担当者として望外の喜びであった。

13) この点に関しては、土井隆義の次の指摘が示唆に富む。「大人たちは、最近の若者は公共の場でのマナーが悪いと嘆きますが、そもそもマナーが成立するためには、意味ある人間として他者が認識されていなければなりません。しかし、最近の若者にとって、そのように感受される他者の範囲はきわめて狭くなっています。この意味で、彼らの傍若無人なふるまいは、他者の存在を無視した悪意の結果などではなく、むしろ他人の存在に無関心なる結果なのです。彼らに欠けているのは、マナーについての教養や態度ではなく、意味ある人間としての他者の認識なのです」（土井（2004）12ページ）。

14) 森田浩之は、『『ビッグイシュー』買わないか』『小銭くれ』と言ってくる（英国の）ホームレスに対して、無視を決め込むのではなく、言葉を返すこと——「ごめんなさい（Sorry）」だけでも——の重要性を指摘している。「・・・『ソーリー』と言ってみた。すると彼も「とにかく、ありがとう」と言ったのである。/・・・要は彼らは金も欲しいが、同時に人間として認めてもらいたいのである。彼らは声を掛けられることによって無視されていないことを知る。無視されていないということは、人間として見てもらっているということである。/いま私は、本当のホームレス対策は金を与えるのではなく、彼らに尊厳を与えることだと考えている」（森田（1999）41ページ）。ここで森田は、平等を包含（inclusion）と、不平等を排除（exclusion）と定義するアンソニー・ギデンズと本質的に同じことを主張している。ギデンズ（1999）第4章を参照のこと。

「自分の暮らしは、富裕層のものだとは思わないまでも、豊かであると思う。自分の意識下または無意識に異質な他者、在日の方や、障害者、貧困層への差別の感情があると思う。この講義で話を聞いたことに加え、あるきっかけで自分を見直してみると、あきれほどに醜い人間だと感じる。今はあいさつの大切さに気付くことができたので、まずは実践し、もっと考え続けたい」¹⁵⁾。

参考文献一覧

- 伊藤元重（2000）『市場主義』日経ビジネス人文庫。
- 入江曜子（2004）『教科書が危ない——『心のノート』と公民・歴史——』岩波新書。
- 川本隆史（1998）「自由と平等の学び合い——人間の権利および義務の再定義に向けて——」、『岩波講座 現代の教育 第9巻 教育の政治経済学』岩波書店。
- ギデنز、アンソニー（1999）『第三の道——効率と公正の新たな同盟——』（佐和隆光訳）日本経済新聞社。
- 黒崎勲（1994）『学校選択と学校参加——アメリカ教育改革の実験に学ぶ——』東京大学出版会。
- 黒崎勲（2000）『教育の政治経済学——市場原理と教育改革——』東京都立大学出版会。
- 高橋哲哉（2003）『「心」と戦争』晶文社。
- 土井隆義（2004）『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える——』岩波ブックレット。
- 中谷巖（1995）「日本的「平等主義」を見直す時」、『季刊アステイオン』37。
- ハーシュマン、A. O.（1997）『反動のレトリック——逆転、無益、危険性——』（岩崎稔訳）法政大学出版局。
- 広田照幸（1994）『日本人のしつけは衰退したか——「教育する家族」のゆくえ——』講談社現代新書。
- 広田照幸（2001）『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会。
- 広田照幸（2003）『教育には何ができないか——教育神話の解体と再生の試み——』春秋社。
- 広田照幸（2004）『教育』岩波書店。
- 広田照幸（2005a）『教育不信と教育依存の時代』紀伊國屋書店。
- 広田照幸（2005b）『《愛国心》のゆくえ——教育基本法改正という問題——』世織書房。
- 藤田英典（1997）『教育改革——共生時代の学校づくり——』岩波新書。
- 藤田英典（1998）「学校選択か学校づくりか——学校再生の可能性——」、『岩波講座 現代の教育 第9巻 教育の政治経済学』岩波書店。
- 藤田英典（2000）『市民社会と教育——新時代の教育改革・私案——』世織書房。
- 堀尾輝久（1991）『人権としての教育』岩波書店。
- 森田浩之（1999）『小さな大国 イギリス』東洋経済新報社。

15) 3年次生・男子。特に印象に残った授業アンケートをもういくつか紹介しておきたい。「経済学と教育問題とは全く異なるモノだと思っていたのですが、関連性があり切り離せないことにまず驚きました。今日の授業で先生がおっしゃっていた用務員さんの話は胸が痛かったです。知らず知らずのうちに階級意識があったのかと思うと何とも言えない気持ちです」（2年次生・女子）。「教育の自由化・多様化が進むことはプラスとマイナスの両面があり、一番問題なのは、やはり平等でなくなることだと思う。エリートを育てるのはいいかもしれないが、やはりそのためには小学校から特別な教育が必要であり、お金がある人だけがそのような教育を受けることになってしまう」（3年次生・男子）。「講義を受けるまでは、教育の自由化を進めていくべきだと思っていましたが、グローバル化による外国人の二世、三世の教育まで考えていくと、教育の機会均等の大切さもよくわかるようになってきました」（4年次生・男子）。「「異質な他者への共感」ということに関して、このカテゴリーに関大の用務員さんに対する私たちの態度も含まれているのに気づかされて、せつない気持ちになりました。私は、もしかしたら伊藤（元重）さんやその他の多くの人たちと同様に階層移動をなくしたがつているのかもしれない。自分を見つめる機会になり、毎回楽しみにしています」（4年次生・女子）。